

原稿案

11月27日シンポジウム「諸宗教の連帯による傷ついた世界への奉仕」

和田恵久巳

1. COVID-19 パンデミックがもたらしたもの

- ・看取り、臨終の弔い、葬儀もできなくなる。
- ・「パンデミックは、富むものと貧しい者、特権を持つ者とそうでない者との残酷なまでの格差を再認識させました」

もともと不安定な非正規雇用者。失職。女性の自死が増加。

ワクチンの不公平。COVAX が推進されるもアフリカはじめ接種が行き届かないところがある。

- ・「共有するもろさへの意識」

だれもが例外なく共有するもろさとリスク。感染症は無関係では
いられないことを示した。誰一人取り残さない (SDGs)。

一人が幸せでないかぎり、全体の幸せはない (宮沢賢治)

一人でも危険があるかぎり、だれも安全ではない。

- ・常に変化し (諸行無常)、相互依存 (諸法無我) する世界である
ことを再認識させられた。

そもそも無関係ではいられない。けれども何もしなくても関係づ
けられる、ということではなく、さらに連帯のための協働を呼び掛
けていると理解。

2. 慈しみと慈悲

- ・「ともに苦しむこと」と慈悲とは

「いたみをともにする文化」

「本来『ともに苦しむ』という意味のいつくしみを、私たちの理解を超える愛のうちに、癒やしの極みまで高めてくださいました」

・仏教の「慈悲」とエコーする。慈はいつくしみ、人々に樂を与えることを意味します。「悲しむ」がついている。「悲」は人々の苦を抜くことです。少し具体的な実践をご紹介します。

・「同悲同苦」の実践～一食を捧げる運動～

月に2～3度、食事を抜いて、その分を献金します。献金は「平和基金」として貧困、紛争など苦しんでいる方たちのために活用されています。ささやかですが、食事を抜くことにより、他者の悲しみや苦しみ的一端を同じくする実践。「同悲同苦、祈り、布施」という仏教精神にもとづく実践。

・パンデミックのなかで

信者間：感染した家族は、別々の病院に入院し、互いに行き来することもできず、互いの消息も分からない。

アイダをつなぐ。家族が入院し、高齢者のみになる。食べ物などを届ける。

葬儀もできない。玄関先で距離をとりながら訪問したり、オンラインで一緒に祈りを捧げる。

地域社会：

立正佼成会には付属病院があり、昨年2月、感染の初期から現在までコロナ患者の受け入れを行っている。マスクが足りない時期には、全国の会員から医療用マスク合計約2万3千枚とメッセージが届けられた。病院の看護師のなかには、お子さんの保育園の登園を自粛するよう言われたりということもあり、医療関係者への偏見があるなかでとても喜ばれた。

ひとさまのためにお役に立ちたい、という菩薩行の精神の現れ。

また今年5月17日より、立正佼成会の本部がある杉並区の要請を受け、ワクチンの接種会場として会議室や駐車場など施設の提供をさせていただいている。

区民の方からお礼のメッセージが届くこともある。

3. 諸宗教の連帯

「この共同文書の目的は、諸宗教の連帯に向けたキリスト教的土台を提供することです」

「諸宗教の連帯」という明確な目的

(1) 世界宗教者平和会議 (WCRP/RfP) の事例

5～7年に一度世界大会が開かれているが、直近の3回の世界大会のテーマは、

「Shared Security」 (2006年第8回世界大会)

「Shared Well-being」 (2013年第9回世界大会)

「Caring for our Common Future」 (慈しみの実践：共通の未来のために) (2019年第10回世界大会)

でした。

人々の間に「壁」を築こうとする現在の世界秩序に対するアンチテーゼとして、WCRP/RfPは「Shared Security」、「Shared Well-being」という、より積極的で新しい宗教的概念を打ち出しました。「自分たちだけの安全や幸せ」でなく、「すべての人が安全で幸せであることを皆で推進すること」が必要だと考えるからです。そのためには、目先の利益を追い求めるのではなく、未来に対して責任を持ち、行動していかななくてはなりません。また「ケア」は誰かのお世話をすることだけではありません。個々の利害を超え、自らの立場や価値観を手放し、相手の話に真剣に耳を傾け、**unlimited empathy**を示すことが**care**の本質と言えます。共同文書にある「聖霊はわたしたちに人々を成長させるためのたまものを与えます。私たちのうちに、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制の働きを生みだし、うぬぼれや挑戦、ねたみの道から遠ざけるよう促します (ガラテヤ) とも通じるところです。

世界全体、さらに未来の人々の幸せを願って生きること、対話・行動することが、神仏の声を聞く宗教者の最も重要な役割との信念のもとで開催されました。

- ・人道支援基金、UNICEF との連携

昨年の4月、コロナで苦しむ人々のために人道支援基金を設立。世界の諸宗教から約4000万円が集められ、アジアやアフリカにおいて、石鹸・マスクなどの衛生用品、とくに困窮にある家庭への水や食料など生活物資や衣料品の支援を行っています。

(2) 対話するとは

- ・「他の宗教を信じる人々と対話するという、キリスト者としての責任と心を開く姿勢を反映している」(原則)

「自分の人生も変えられる準備が必要です」

これがモノログとダイアログの違い。「諸宗教対話」と銘打ったものでも、それぞれの考えや見方を発表するだけでは、モノログになってしまう。自分自身が変わる準備をする。そのリスクを負う準備をすることが必要だと思います。ときには

仏教では「柔軟」ということを大事にしますが、これは心が常に真理に開かれていること、真理の通りに行動できることで、今までの考え方は間違っていた、あるいは不十分だったと分かった時、すぐに改める準備ができていることです。このような精神の持ち主は周囲に争いを作らず、世界を明るくします。

4. 省察とは

「苦しみに加担したと告白することは、わたしたちがより正しい生活を送ることを可能とする、真の刷新への出発点になります」

「知らず知らずに犯したる罪咎を懺悔し奉る」

直接傷つけていることも、つながりあう世界、諸法無我の世界の一員として傷つけていることも自覚していく。

「内省」することを教えられています。

これは、自己を知る、他者を知る、自他の間を知るとも言えます。昭和44年山田霊林先生は、道元禅師について、このように述べられています。道元禅師は何を見ても何を聞いても、それが「自分自身」であることを感じられました。わたしたちは「自己」と「他人」と

を、きっかり区切って感じますが、禅師には「他人」という言葉がありません。わたしたちが「他人」と呼ぶところを、禅師は「他己」と申されます。他は他であるが、それがそのまま「己れ」として感ぜられ、その喜びも悲しみも「己れ」の喜び「己れ」の悲しみなのです。大宇宙にいかなることがあっても、そのことごとくが、自分自身の問題であるのであります。

他者と出会い、心を広げて対話し、自他一如に向かっていく私でありますように。